

人権通信

2024年度 第3号

城ノ内中等教育学校人権委員会・レベラーズ部

こんにちは、人権委員会・レベラーズ部です。

2月は寒波の影響で寒い日が多かったですが、3月に入って少しずつ暖かくなってきました。

学年末考査も終了し、ほっとしている人も多いのではないかと思います。

さて、今回の担当は41・42・43ホームルームの人権委員、およびレベラーズ部の皆さんに、先日行われた人権映画会の感想を書きいただきました。

映画『オレンジ・ランプ』

◆あらすじ◆

妻・真央や二人の娘と暮らす39歳の只野晃一は、充実した日々を送るカーディーラーのトップ営業マン。そんな彼に、顧客の名前を忘れるなどの異変が訪れる。下された診断は、「若年性アルツハイマー型認知症」。驚き、戸惑い、不安に押しつぶされていく晃一は、とうとう退社も決意する。心配のあまり何でもしてあげようとする真央。しかし、ある出会いがきっかけで二人の意識が変わる。「人生を諦めなくていい」と気づいた彼ら夫婦を取り巻く世界が変わっていく…。

◆メッセージ◆

39歳で認知症と診断されながら、10年後の現在も会社勤務を続けつつ、認知症本人のための相談窓口の活動や自身の経験を語る講演などを行っている丹野智文さん。この作品は、認知症とともに笑顔で生きる丹野智文さんの実話に基づく物語です。認知症の人（他の病気や障がいのある人も）、その人のできることやしたいこと（意思）を大切にしていくこと、そしてそれを支える社会の在り方とは。多くのことを問いかける映画を通して自問してみてください。

・私は、帰り道が分からなくなった主人公を、町の人たちが助けてくれた場面を見て、心があたたかくなりました。私も、もし認知症の人が助けを求めていたら、適切な手助けができるような人になりたいと思いました。そのためにも、今回の人権映画会のように、認知症の当事者の立場に立って考える機会を持つことはとても大切なことだと感じました。

・私がこの映画で一番心に残ったのは、認知症でもできることはあるということです。私たちがよかれと思ってしていることでも、他の誰かにとっては余計なお世話になるかもしれないことを再認識させられました。本当にその行動は必要なのか考えて行動していこうと思いました。

・映画を見て、人にはそれぞれできることやいいところがあり、周りの人はそれを尊重して、その人が困っていたら手を差し伸べることが大切だと感じました。そうすることで、すべての人が自分の生きがいや生きる意味も感じつつ、困ったときも一人で抱え込むことが減って、あたたかい世界になるのではないかと思います。

・この映画から、一人の人間として相手に接することの重要性を学んだ。冒頭の場面にあったように、主人公を「認知症の人間」として見るのでは、相手のことを何一つ理解できないのではないかなと思う。偏見をなくするためには、相手のことを人格を持った個人として知ろうとしていくことが大切なのではないかと感じた。

・『オレンジ・ランプ』を見て、認知症の人だから何もできないと決めつけて、その人のできることまで周りが全てしてしまうのは、認知症の人にとってとてもつらいことなんだと気づくことができました。また、認知症の人とその家族が気持ちをしっかりと伝え合って、困ったときは助けるといったように、互いの気持ちによりそうことが大切だと感じました。

・『オレンジ・ランプ』を見て、変わろうとする努力が大切だと感じた。認知症になってしまった本人や家族が少しでも前に進めるよう、周囲の人たちがそれを手助けすることで、良い方向へ変わっていくことができる。だからといって、「認知症になってしまった人は何もできない」と決めつけるのではなく、困っているときこそ助けられる人になろうと考えることができた。

・私も家族や周囲の人が認知症を発症したら、すべてのことを手助けしてしまうと思います。しかし、この映画を見て、すべてのことを助けてしまうのは、本当の意味での助けにはならないとうことに気づくことができました。助けて「あげる」という意識を捨て、すべての人間は支えあって生きていることを念頭に置いた上で、「助けあい」たいと思います。

41・42・43ホームルームの人権委員、およびレベラーズ部の皆さんの意見はどうでしたか？この機会に、ご家族とこの作品を鑑賞して、お互いに感想を話してみるのもいいかもしれませんね。

この人権通信が、人権について考えるきっかけになればと思います。

